

アラン・シリトーの *Uncle Ernest* における時間表現

白 谷 敦 彦*

1. 序

本論文はアラン・シリトーの作品 *Uncle Ernest* の時間表現について論ずる。この作品の概要は次のようなものである。孤独な中高年の Ernest Brown がいつものカフェで食事をしていると、姉妹（姉は 12 歳位）が入ってくる。妹はケーキを食べたいと姉にねだるが、姉は帰りの交通費しかないと言い、譲らない。姉が愚図る妹を連れ帰ろうとすると Ernest Brown は二人を引きとめ、ご馳走してあげる。それ以来、姉妹は Ernest Brown のいるカフェに立ち寄るようになり、彼は二人にご馳走したり贈り物をしたりすることが日常的となる。ある日突然 Ernest Brown は警官に姉妹に二度と接触しないように警告を受け、カフェを後にする。ラストシーンは、彼の足は酒場と向かい、酒場に入ると彼の視線はアルコールへと注がれる、というものである。Ernest Brown が姉妹と会話をかわす場面には短くて平易な表現が使われ、テンポよくストーリーが展開していくのであるが、その他の、Ernest Brown が過去を振り返ったり、自分の人生や生き方について考えたりする、いわゆる内省的な

* 福岡大学人文学部教授

場面では一文が長く、かなり難しい表現や構文が用いられ、読者はすんなりと読むことができない。つまり、読むのに時間がかかり、会話のシーンと比べると、時間の流れがスローになったように感じられる。また、独特の時間表現が用いられ、時間の流れが前後している。本論文ではこの Ernest の内省部分を取り上げ、時間表現について考察する。

2. *Uncle Ernest* における時間表現

物語の始まりは Ernest Brown がカフェに入ってくるシーンである。彼はカウンターでティーとトーストを注文し、受け取るとテーブルに腰を下ろし食事を始める。では、食事中に考え事をしている次のシーンを参照いただきたい。下線は筆者によるものである（以下も同様）。

For years he had eaten alone, but was not yet accustomed to loneliness. He could not get used to it, had only adapted himself to it temporarily in the hope that one day its spell would break. Ernest remembered little of his past, and life moved under him so that he hardly noticed its progress. There was no strong memory to entice him to what had gone by, except that of dead and dying men straggling barbed-wire between the trenches in the first world war. Two sentences had dominated his lips during the years that followed: "I should not be here in England. I should be dead with the rest of them in France." Time bereft him of these sentences, till only a dull wordless image remained.

引用符の施された部分の第1文の should は現在のことを言っている。下線を施した第2文の I should be dead はそれに対応するもので「イギリスに居るべきではない」「他の場所に居るべきでもない。そもそも存在するべきではな

い。つまり生きていてはいけない」という論理でつながっていつている。しかし、死ということを考えた後で with the rest of them（仲間たちと一緒に）というのが思い浮かんでいる。戦死するという動作に思考が移っていつているのである。そしてさらに in France（フランスの地で）ということに思いが行っている。これは完全に戦死するという行為（動作）を表している。従って、この時点まで表現されると第2文は I should have died の方がいいと思われる。しかし、第1文とのつながりから I should be dead という表現が選ばれ、途中からそれが I should have died という表現に近づいていつているのである。作中人物の思考の順序が反映されているということができよう。

上のシーンに続く、次のシーンをご覧いただきたい。

People, he found, treated him as if he were a ghost, as if he were not made of flesh and blood—or so it seemed—and from then on he had lived alone. His wife left him—due to his too vile temper, it was said—and his brothers went to other towns. Later he had thought to look them up, but decided against it: for even in this isolation only the will to go forward and accept more of it seemed worth while.

下線を施した had lived の前の表現に注目されたい。時制は過去である。過去のある時点であろうということはわかる。それがずいぶん前なのか最近のことなのかはわからない。しかし、ずいぶん前のことであつたにしろ、つい最近にも当てはまることも考えられる。ずいぶん前から、そしてつい最近も、そして今もということかもしれない。振り返って考えているから過去なのであつて、今も当てはまることなのかもしれない。そして下線部の過去完了が現れる。これは視点は現在であつて、過去のある時点を基準とし、その基準点よりも前の時間で live してきたことを表している。この基準時を found した時とすると

時間が合わない。Foundした過去の時点があって、それから live alone してきたのであるから、この過去完了は基準時が found した過去の時点ではない。別の時間である。示されていない、今よりは過去で、found の後の時間である。As if が過去時制であるのも特徴的である。それまで he be ghost であったと表現する過去完了ではなくて、単純過去を用いていることに何らかの理由があるはずである。Found した時間よりも前も、そして found してからもその人々の態度は変わらなかったということを作者は表現したかったのである。「Ernest はあることに気づいた。人々が自分を幽霊のように扱っていることに。そしてそれは気づく前も気づいてからもそうであった。それから一人で生きてきた。ある過去の時点まで（過去完了で表現されること）」というように読んでいくと時間を再解釈することが必要となってくる。His wife left him の時間はどこであろうか。この時間が had lived の基準時と考えると矛盾が生じる。妻が去る前から live alone したということになるからである。従って、His wife left him の時間も found とほぼ同じ時期か、少なくとも from then on の then の前である。Ernest 自身もどちらが先かわかっていないのかもしれない。また、本人もわからないことを表現しようとするシリトーの意図がこの表現を選ばせたのかもしれない。次の下線部 had thought の基準時も漠然とした過去である。兄弟たちが去った後ということをはっきりしているが、それ以外過去ということではわかる時間はない。これは過去のことを回顧しているので漫然とした過去の出来事の順序はあるのだが（妻の家出、そして一人ぼっち）、整然とした順序はわからないということをシリトーは表現しているのであろう。妻の家出と兄弟の移動もどちらが先かはわからない。あれこれと過去のことには思いが及ぶ様子が表現されているものと思われる。

上のシーンに後続するシーンを一部割愛する。次のシーンをご覧ください。

He lifted the last piece of toast and tomato from his plate, then felt dregs of tea moving against his teeth. When he had finished chewing he lit a cigarette and was once more aware of people sitting around him. It was eleven o'clock and the low-roofed café was slowly emptying, leaving only a dozen people inside.

下線部の過去完了の基準時はその前に書かれた事柄ではなく、後ろの lit である。噛み終わってから（完了の意味がここに出る）タバコに火をつけたということである。時間の流れの順序に事柄が描かれているのであるから when he had finished chewing の部分は単純過去の when he finished chewing でいいはずである。読者は基準時を探し、基準時は先行文脈にあるのではなく、後続の lit であることに気づくのに少し時間がかかる。しかし、ここにも効果がある。読者は he lit a cigarette まで読んだ時点で、lit という行為の前に finished chewing という行為が終わっていたということがわかる。これは作中人物の心理を反映していると考えることができよう。自分はタバコに火をつけた。それを意識した。知らない間に食べ物を噛み終わっていた。自分は食事を終えたのだという認識がその時始めて頭に入ってきた。このように思考がなされたのである。それを裏付けるのは、これに後続する and was once more aware of people sitting around him という表現である。食事を終えたということが認識され、自分の周りの様子がその次に意識されたのである。割愛してしまったが、この段落の前には彼の内省が描かれる。考え事をしており、彼の意識はそちらに注がれているため、自分が今何をしているかということに対する認識がおろそかになり、タバコに火をつけた瞬間、自分の行為に意識が戻り、食事を終えていた（終えたばかりであった）ということが認識されたのである。そして認識は自分の周りの状況へと広がることになる。ここでも時制表現が作中人物の思考の様子を描写するのに効果的に用いられている。

では少し割愛し、次の、ふたりの少女がカフェに入ってくる場面を見よう。

As he was being served two small girls came in. One sat at a table, but the second and elder stood at the counter. When he returned to his place he found the younger girl sitting there. He was confused and shy, but nevertheless sat down to drink tea and cut a cake into four pieces. The girl looked at him and continued to do so until the elder one came from the counter carrying two cups of steaming tea.

動作がきびきびと表現される。短いセンテンスで表現されているのが効果的である。しかし、下線部のところで時間の間延びがある。それまでは came, sat, returned, found, drink という短時間で行動が終わる動作が表現されているが、下線部の部分は時間がかかる動作である。さらに、それに時間がかかったことを表す表現が後続する。The girl looked at him and continued to do so until という部分である。時間がかかったためにそれを見つめるのにも時間がかかったことを表す表現である。これまで見てきたように、時間表現においては基準時の再解釈が必要となることがあり、時間的視点の前後への移動を要求される表現があったが、この部分では、途中から時間が止まったようにスローに感じられ、そのスローな時間の間中女の子がじっと見つめていたという、時の流れが速くなったり遅くなったりしているのである。これは Ernest の気まずい気持ちを表現しているという効果もあるのであろう。The girl looked at him and continued to do so until という表現から再び主人公の動作 (sat down, drank tea and cut a cake into four pieces) が読者の頭の中で反芻される。これもシリトーの意図的な表現であると考えられる。

この次のシーンは少し割愛し、その次のシーンをご覧いただきたい。

Ernest was calculating how many yards of rexine would be needed to cover the job he was to do that afternoon, but when the younger girl began speaking he listened to her, hardly aware that he was doing so.

ここでも時間が戻っている。Ernest はあれこれ考え事をしている。年下の女の子が話し出したとき、聞くとはなしに聞いていたことが示されるので、聞きながら考え事をしていることがわかる。2つの動作が同時進行しているのである。読者はもう一度振り返り、Ernest が calculating という動作と listening という動作を同時に行っていたことを再解釈することになる。

この次のシーンを参照いただきたい。姉妹の会話が始まるシーンである。

"If you've got any money I'd like a cake, our Alma."

"I haven't got any more money," the elder one replied impatiently.

"Yes, you have, and I'd like a cake."

She was adamant, almost aggressive. "Then you'll have to want on, because I've only got tuppence."

"You can buy a cake with that," the young girl persisted, twining her fingers around the empty cup. "We don't need bus fares home because it ain't far to walk."

"We can't walk home: it might rain."

"No it won't."

"Well *I* want a cake as well, but I'm not walking all that way," the elder girl said conclusively, blocking any last gap that might remain in her defences. The younger girl gave up and said nothing, looked empty in front her.

Ernest had finished eating and took out a cigarette, struck a match

across the iron fastening of a table leg and, having inhaled deeply, allowed smoke to wander from his mouth.

ここでも時間が戻っている。下線部の過去完了により女の子の会話が進んでいる間に Ernest が取った行動（食事を終え、タバコを取り出し、マッチを擦って…という行動）が表現され、時間が戻っている。読者は彼の取った行動を読みながら、もう一度女の子の会話を反芻することになる。

この次のシーンは少し割愛し、その次のシーンをご覧いただきたい。姉妹がけんかし、カフェを出て行こうとするシーンである。

She unscrewed clenched fingers from her eyes and looked up, while the elder girl glared at him resentfully and said: "We don't know anything. We're going now."

"No, don't go," he cried. "You just sit down and see what I'm what I'm going to get for you." He stood up and walked to the counter, leaving them whispering to each other.

He came back with a plate of pastries and two cups of tea, which he set before the girls, who looked on in silence. The younger was smiling now. Her round eager eyes were fascinated, yet followed each movement of his hands with some apprehension. Though still hostile the elder girl was gradually subdued by the confidently working actions of his hands, by caressing words and the kindness that showed in his face. He was wholly absorbed in doing good and, at the same time, fighting the feeling of loneliness that he still remembered, but only as a nightmare is remembered.

下線部の *at the same time* という表現の次に彼が *fight* していたことが示される。読者は彼がしていたこと (下線部の *at the same time* の前: *wholly absorbed in doing good* という行為) へ振り返り、*fight* もしていたことを思うことになる。ここでも時間が少し逆行し、そしてまた流れている。

これにすぐ後続する次の描写を見よう。

The two children fell under his spell, began to eat cakes and sip the tea. They glanced at each other, and then at Ernest as he sat before them smoking a cigarette.

子供たちがケーキを食べる様子が描写され、次に Ernest へと描写の対象が変わるのであるが、*smoking a cigarette* という表現によって、その間にタバコを取り出し火をつけたことがわかる。読者は *smoking a cigarette* という表現を読んだ後から、2つのことが同時進行していたことを知り、少し前に戻って両者の行為を思い描くことになる。ここでも読者にとっては時間が少し戻ることになる。

さて、この場面を最後に、ここから先は時間が戻ることはない。テンポよく事が進んでいく。これまで Ernest は様々なことに思いをめぐらせていたのであるが、そういう行為をしなくなったことがわかる。上記の引用部分にすぐ続く、次の描写を見よう。

The café was still almost empty, and the few people eating were so absorbed in themselves, or were in so much of a hurry to eat their food and get out that they took little notice of the small company in the corner. Now that the atmosphere between himself and the two girls that grown more friendly Ernest began to talk to them. "Do you go to school?" he asked.

The elder girl automatically assumed control and answered his questions. "Yes, but today we had to come down town on an errand for our mam."

"Does your mother go out to work, then?"

"Yes," she informed him. "All day."

Ernest was encouraged. "And does she cook your dinners?"

She obliged him with another answer. "Not until night."

この日以来、姉妹は Ernest Brown のいるカフェに立ち寄るようになり、彼は二人にご馳走したり贈り物をしたりすることが日常的となる。Ernest が深く内省する場面はなくなり、小気味良いテンポでストーリーが流れてゆく。Ernest にとって、迷うものがなくなったこと、楽しみができたこと、幸せな時間を過ごしていることが文に反映されている。¹ この後 Ernest は、通報を受けて事情を知った警官から、Ernest の行為は姉妹の教育上悪いからという理由で、姉妹に二度と接触しないように警告を受けることになる。彼はカフェを後にし酒場へ向かう。酒場に入った彼の視線の先にはアルコールがあるというのがラストシーンである。この物語の前半にあった、Ernest の内省的な描写はないまま淡々と事の推移が語られる。ラストシーンを見よう。

Then he began to shed agony at each step. His bitterness eddied away and a feeling the depth of which he had never known before took its place. There was now more purpose in the motion of his footsteps as he went along the pavement through midday crowds. And it seemed to him that he did not care about anything any more as he pushed through the swing doors and walked into the crowded and noisy bar of a public house, his stare fixed by a beautiful heavily baited trap of beer pots that would take

him into the one and only best kind of oblivion.

Agony, bitterness, a feeling the depth of which he had never known before, did not care about anything という、彼の気持ちを大まかに表すことばはあるのだが、彼が考えている内容は語られない（これにもシリトーの意図があるのであろうが）。物語の前半とは打って変わって深い内省的な描写がないため、主人公の気持ちを知ることができないまま、読者は取り残されてしまう。独特のエンディングを体験することになるのである。

3. 結論

本論文はアラン・シリトーの短編 *Uncle Ernest* における時間表現について考察をおこなった。一見文法上変に感じられる表現も主人公の意識や思考を反映するために効果的に用いられているといえることができる。

注

1. Ernest が幸せな時間を過ごしていることは、本文引用の少し後にある、次の場面からわかる。

During the following weeks they came to see him almost every day. Sometimes, when he had little money, he filled his empty stomach with a cup of tea while Alma and Joan satisfied themselves on five shillings'-worth of more solid food. But he was happy and gained immense satisfaction from seeing them bending hungrily over eggs, bacon and pastries, and he was so smoothed at last into a fine feeling of having something to live for

that he hardly remembered the lonely days when his only hope of being able to talk to someone was by going into a public house to get drunk. He was happy now because he had his 'little girls' to look after, as he came to call them.

参考文献

- 大江三郎. 1982. 『動詞 (I)』 東京：研究社出版.
大江三郎. 1983. 『動詞 (II)』 東京：研究社出版.
大江三郎. 1984. 『英文構造の分析—コミュニケーションの立場から—』
東京：弓書房.